

『かなり緩やかな愛の前進』(水声社)刊行に際して

本書に訳出した短篇小说5篇(「ひたむきな戦士」「かなり緩やかな愛の前進」「過酷な恢復」「渡られし橋」「習慣を失くすエトレ」)の著者ジャン・ポーランは、20世紀フランスを代表する月刊文芸誌『新フランス評論』(半年毎であるが、現在も刊行されている)の編集長を長らく務め、幾多の作家を世に出したフランス文壇の大御所的存在である。

しかし、その短篇小说は、全集の第1巻としてガリマール社から2006年に発刊されているが、とくに日本ではほとんど知られていない。事実、今回お世話になった株式会社水声社の社長もその編集部員も大学仏文科出身であったが、わたしの原稿で初めてその存在に触れたのであった。

さて、本書は、決して読み易くはない。フランス本国においてもその難解さはよく知られるところである。しかし、妙な言い方かもしれないが、そこにはわたしのすべてがあるように思われてならない。それほどわたしはそれらに親しんできた。それを生きてきたのである。

ところで、そんなわたしであるが、今改めて心に懸かってやまないことがある。奥羽大学の学長就任予定5日前に急逝した元東北大学教授佐藤房吉先生のことである。わたしは先生に大学1年のとき(昭和48年)フランス語を初めて習ったのであったが、平成元年3月、お亡くなりになる半月くらい前であったろうか、久しぶりにお会いした席で、なんと「先生、休講が多かったですね」と口走ってしまったのである。わたしは、それほど先生の授業が楽しみで仕方がなかったのです、と言いたかったのである。ところが先生は、「そうだったかなあ」と真剣にお悩みになられた。たぶん、続けて2回ほど(あるいはそれからややあってもう1回)授業がなかっただけであったろうに(先生が研究されていたフランス語接続法の大家がちょうどそのとき来日していたことを知ったのは、後になってからのことである)。

フランス語を学び始めたあの頃の高揚感がどうしようもなく懐かしい。生まれ変わる事ができたなら、わたしはもう一度フランス語を学ぶであろう。但し、今度は毎回先生に「ありがとうございます」と繰り返し心の中で御礼を言いながら。

(元研究室助手、元奥羽大学文学部フランス語フランス文学科教授 榊原直文)